

宗教文化の授業研究会

本研究会は、2009年に科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表:星野英紀・大正大学)の教材研究の試みとして発足し、その後2010年に「宗教と社会」学会のプロジェクトとして認められた。2011年に科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表:井上順孝・國學院大學)の研究がはじまったことから、この科研の研究と連携した活動を行うこととなった。2011年度は、宗教施設の見学を一つのテーマとし、学生の宗教施設見学を実施しながら、複数の大学の教員が合同で引率、考察する機会を設けるよう工夫した。

第1回宗教施設見学研究会 「東京神田の神社と教会」ⁱ

【日時】2011年7月10日13時半～

【場所】ニコライ堂、神田神社、湯島天神

国学院大学のほか、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学、埼玉大学、明治学院大学の留学生、日本人学生が30名余りが参加した。神道文化学部で「神道と国際交流」の授業を受講した学生が主体となり、留学生に参拝作法の説明をしたり、各神社の由来や建築について説明するなどした。また、ニコライ堂では、国学院大学研究開発推進機構PD研究員のヤニス・

ガイタニデイス氏が東方正教会、ロシア正教、ニコライ堂について説明を行った。

第2回宗教施設見学研究会「創価学会」

【日時】10月2日9時～

【場所】創価学会国際会館、聖教新聞社(東京、新宿)

井上順孝教授の授業で実施する創価学会見学を、本研究会にも開いていただいた。国学院大学のほか、東京大学、上智大学の教員、学生も参加し、国際会館、民音音楽博物館、聖教新聞を見学した。聖教新聞では、創価学会の幹部職員との懇談会もあり、学生が直接創価学会に関するさまざまな疑問を投げかける機会を持つこともできた。



i 平藤喜久子「宗教文化教育の授業研究会の試み」(『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第4号、2011年9月)でも詳しく紹介している。

第3回宗教施設見学研究会「福蔵院節分」

【日時】1月28日(土)13時半～

【場所】福蔵院、東京大神宮

大正大学の星野英紀教授のご厚意により、星野教授が住職を務めておられる福蔵院の節分会を見学させていただいた。国学院大学、東京外国語大学、東京大学、東洋英和女学院大学等から、留学生も含めた学生たちが参加した。福蔵院の節分会は、地元の方々を中心となって企画、運営される大変賑やかなものであった。留学生はもとより、日本人学生のほとんどが寺院での節分は体験したことがないとのことであった。東京大神宮は、近年婚活に御利益があると話題になっており、この日はバレンタインデー前ということもあり、多くの参拝者で賑わっていた。そこでは現代の神道ブームについて学生と討議した。



第4回宗教施設見学会

「天理教月次祭と教団本部、天理参考館」

【日時】2012年2月26日(日)9:00

【場所】天理教(奈良県天理市)

天理大学の岡田正彦教授のご助力を得て、天理教の月次祭と教団本部、天理参考館の見学を行った。学生の参加はなかったが、15名ほどの研究者が参加し、授業教材とする写真を撮影したり、式次第の観察を行ったりし

た。また天理参考館を見学し、博物館で宗教文化を学ぶ方法や説明等についての知見を得た。

「宗教文化教育の教材研究会」

【日時】2月26日(日)13時半～17時

【場所】天理大学研究棟3階・第1会議室

【発表者】

猪瀬優理(龍谷大学)「宗教社会学」を担当して—シラバスと実際の授業」

大谷栄一(佛教大学)「京都の盆行事をフィールドワークする」

小原克博(同志社大学)「宗教文化を伝えるための素材と技法——テキストからリッチメディアまで」

【コメンテーター】土屋博(北海道大学)

【司会】井上順孝(国学院大学)

天理教の見学会に引き続き、研究会を行った。猪瀬氏は、ご自身の宗教社会学の授業のシラバスを手がかりに、授業内容を紹介し、宗教社会学として教える内容をどのように選択し、授業として組み立てるのかを論じた。大谷氏は、大学のある京都の仏教民俗行事をテーマとして学生にフィールドワークを実践させる試みとその成果について論じた。小原氏は、授業で活用している現代的なメディアについて具体的な例を示しながら論じた。総合討議では、宗教社会学として、いまなにを教えることが必要なのかといった問題や、学生にフィールドワークを実践させる上での注意点、また You Tube などの現代的なメディアを授業に採り入れる上での効果や問題点などを巡って活発な議論がなされた。

2012年度以降は、宗教施設だけではなく博物館等の見学も行いながら、研究会を積み重ね、それぞれの研究者の授業内容がより豊になるよう研究者間のネットワークの構築を行っていきたい。

(平藤喜久子)